優秀賞

言葉の花束

東京都　サレジアン国際学園高等学校二年　名倉　舞

花束を持ったおばあさんが、突然、家に来た。

これは小学生の時の話だ。地元の小学校に通い、長いようで短かった六年間が過ぎ、卒業式の日になった。年齢の半分も通い続けた学校を卒業することに、あまり実感が湧かず、いつもと変わらない一日を過ごした。卒業式は感動するもの、別れは寂しいものと思っていたが、いざ自分ごとになると感情が追いつかなかった。

夕方になり、卒業式から帰ってきたときのことだった。玄関のチャイムが鳴った。この時間帯に訪ねてくる人は少ないので、不思議に思いながらも特に気になりもしなかった。インターホンには、見覚えのあるおばあさんが映っている。その手には、可愛らしい花束が握られていた。

「卒業おめでとう。」

声に聞き覚えがあった。通学路の交差点の前でいつも箒を持って、お掃除をしていたお豆腐屋さんのおばあさんだった。毎朝、店先を掃いていたのを覚えている。私は毎朝、そのおばあさんの前を通る時に、

「おはようございます。」

と声をかけていた。それは、小さい頃から「挨拶は大事」と教えられてきたからだ。

「入学した時から毎朝挨拶してくれて、ありがとう。元気な『おはようございます』という声を聞いて、どんなに嬉しかったか。こんなおばあちゃんに毎朝挨拶をしてくれて。それで今日一日頑張ろうと思って、元気でここまで生きてこられました。」

驚いた。たった一言、何気ない挨拶で、人を喜ばせ、元気づけることができていたなんて。挨拶は当たり前のことだと思っていたけれど、そのおばあさんにとっては毎日の支えになっていたのだ。私自身も、おばあさんが「おはようございます」と返してくれることが嬉しかった。

その時、たった一言で人の気持ちを動かすことができるということに、とても感動した。言葉の力というものを改めて知った。「おはようございます」という当たり前の挨拶で、互いに元気づけられていたなんて。花束を受け取りながら、嬉しい気持ちと共に、大きな発見を実感した。

その後、中学校に進学し、高校受験をすることになった。人生で初めての受験だったこともあり、緊張と不安に押し潰されそうになった。緊張感の高まっているクラスでは、誰かに不安を吐露することもできなかった。

そんなある冬の日、塾で模試の結果が返却された。自分の目標にしていた点にあと少し届かなかった。模試の結果を志望校に提出することになっていたので、かなり落ち込んだ。今回の点数が響いたらどうしようと、そればかり考えていた。

数週間ぶりに祖母の家に行った。今まで感じたことのない緊張感に押し潰されそうなこと、合格するビジョンが見えなくなってきていること、不安に思っていることを全て相談した。すると、祖母は一言こう言った。

「舞ならできるよ。」

成績だけで評価される日々の中で、いつの間にか傷ついていた自尊心が救われたような気がした。自分を信じてくれたことが、何よりも嬉しかった。この一言だけで、祖母が信じてくれていること、期待してくれていることが伝わってきた。その思いに応えるために、頑張ってみようと思えた。

上手くいかない時、この「舞ならできる」という言葉を心の中で思い出すことによって、力が出てくるような気がした。その結果、志望校にも合格することができた。嬉しかった。あの日の一言は、今でも私を突き動かしてくれている。

何気ない挨拶や応援の言葉で、人の心を動かすことができる。この二つの体験で、それを学んだ。言葉の持つ力は強大だ。だからこそ、言葉を交わすことは重要だと思う。「おはよう」「ありがとう」そんな当たり前の言葉を、当たり前に言えるようになりたい。今度は、自分が言葉の花束を贈りたい。